



(號八十七百二第)

統一俳句、自慶會、各地雜報

……多數

課題和歌「野外董」

子爵 清岡長言選

日蓮上人研究の捷徑

文學士 笹川臨風

機微譚語 (五三) 大義名分 (五四) 寛濶の襟度

山根青村

日蓮聖人教義綱要 (第八回)

僧正 井村日成

日蓮主義の信仰と活動

大僧正 本多日生

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發

▶ 番三三五三三京東座口替振 ◀

將中軍海
述君郎太鐵藤佐

刊新最

我萬邦無比なる國體の尊嚴を能説し罄くして國民の自覺を叫び根本的に忠君愛國を唱へ併せて英傑日蓮上人の人格と教義の峻絶を鑽仰賞揚して思想の撰擇と修養を奨むるものは本書也。尊嚴の國體と秀絶の教法との相抱冥合の説述は論義整然字句熱烈にして一讀正氣靈動の概を生ぜしむ、國家、社會、教育、婦人の諸問題及び神儒佛、外來思想に對する批判、並に歐洲戰亂に對する感想、青年に對する訓誡、海外發展策等滔々數萬言辯じ明さるはなし。

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

日本國體と日蓮主義

三六判總クローズ函入
紙數四百五十頁
定價壹圓貳拾錢
送料 八錢

館文博

東京市

本町三

(行印會秀三 地番一目丁二町代土美區田神市京東)

▲本誌事務取扱所 東京市小石川區白山前町統一編輯所 (▲本誌定價一冊) 發行所 東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人 松尾英四郎 (▲印刷人 鈴木日雄) (▲郵政特五五)

みたから

毎月一回七日発行
一枚代 貳錢五厘
郵税以上 貳錢

出づ!!!

本紙は統一常定讀者へ購讀をお願ひしま
す御不用の方は「返戻」又は葉書でも
寸御知らせ下さい。夫以來送りませぬ左
なくば御購讀と信じ「統一」代金と共に集
金郵便差上げますから御支拂を頼みます
○みたから第一號目録

本誌發刊の辭
後藤内相祝辭
平沼東京府知事祝辭
井上東京市長代祝辭
高橋東京市長代祝辭
労働者中心として 佐藤海軍中將
工場の現 國民道徳
二十餘年目に親子姉弟の再會
明治天皇の御高徳
印度の尾蛇の譚
死んだ氣になつて
よせあつめ
國家的社會政策の一助としての運動
私の所謂労働者の善導 本多 日生
松尾 鼓城
其 他
▲小新聞型四ページ
顯本の寺院には配本せぬかも知れませぬ
御入用の方は御申込を乞ふ
本誌は一年々タツタ三十錢故集金上面倒
に付前金にあらざれば送本せず又前金切
と共に送本中止します
取 扱 所 小石川區白山前町 統一編輯所

急 告

三月の五日付で、活版部の方から、東京
印刷業者組合の決議に付、印刷賃を以來
又々三割以上値上げるから承知せよとの
通知が來ました。どこまで値上げになる
のてせうか、此上は誌代を上げるわけに参
りませぬから、頁數でも少くするより外
はありませぬ、悪からず御承知下さい。
一昨年からは、之れて都合五回の
値上です。従来例へば五錢で出
來たものが十二三錢もかゝるやうになつ
たのです。御購讀者の御推量をお願いします。
△次に永らく代金不納の方で、問合せ
も御返事もなく、又集金郵便は拒絶する
こんな方には次號からは送本を中止する
かも知れませぬ。
△又永らく無代で配達しました方々へも
以來は成るべく代金御拂込をお願いします
ます。
△以來代金は前金の取立方法に漸次取り
運んで行くつもりです。豫め御承知下
さい。
△新に御購讀は一二月の内に前金を集
金郵便で御依頼致しますから御承知下さ
い。

改正定價並に廣告代價

●一冊十錢。郵送分は別に五厘申受候
●前金送金分に限り郵送料申受ず候
●代金未済の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年
目毎に御便利上集金郵便差上げます（但
此場合郵便局手数料五錢加算仕るべく
候）
●故に郵便送り當方より集金のものは半
ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受
候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金
は壹圓廿錢にて宜しく候
●送金は振替貯金口座東京三三五三番
統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの
郵便局にて御拂込のみ下され度、確實に
御座候小爲替は紛失のおそれがあります
領收證は特に御請求以外は本誌上に表
として取纏め掲載致します
●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五
拾錢。三分一頁六圓
●▲五號活字十八字詰一行二拾五錢
●交換及び義務廣告は断り申候

御注意

●多數中の事に付若し難論不配論の節は御一報か乞
●當方より御送金郵便差上げ候節、多數の事に付計算相違
●又二重の御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●集金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●有金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●拒絶の御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●取消の御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●多數中の事に付若し難論不配論の節は御一報か乞
●當方より御送金郵便差上げ候節、多數の事に付計算相違
●又二重の御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●集金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●有金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●拒絶の御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節
●取消の御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節、御送金郵便差上げ候節

日蓮主義の信仰と活動

(速記)

本 多 日 生

△諸法實相

所が法華經と云ふものは此の三つの大
きな問題に就て天地宇宙を説明すること
も諸法實相と云つて、頗る哲學的である、
一切の天地に現はれて居る此の世の中の
物は、何處から出たかと云ふと、方便品
に所謂「如是相性」と云ふ風に如是相、
如是性、是は皆な諸法と云ふものが有る
儘に存在した實相であつて、色々の因縁
の關係に依つて遷り變りがありますけれ
ども、一物と雖も何にも無い所から生ず
ると云ふことは無い、又有りし物は一物
も無くなることはない、「諸法常住」であ
ると云ふことを説明したものである。是
はチョツと面倒なやうであるけれども直
ぐ分かる、一物たりとも何も無い所から
出て來ると云ふことは無いのである。手
品を觀ても分る、何にも無いハンカチ
フの中からハツと云ふと卵が出て來るけ

れども是は手に握つて居つたか袖の中に
隠してあつたものを早くハンカチーフ
の中に入れて違ひないのである、決し
て卵が何にも無くして出來る譯ぢやない
又五十錢銀貨を無くする手品を能くやる
併し決して是が無くなつたのではない、
チャンと外に存在して居るので、無くな
るものぢやない。

△基督教の造物論を排す

所が基督教の方は手品師がハツと言つ
たら鳩が飛んで出たから、是は神が造つ
たのだと斯う思ふ、極く田舎漢の考へ見
たやうである。是も何處かにあつた鳩か
何かを手早く其處へ投げ出しただけのも
のである。斯の如く一切萬物造ると云ふ
ことは出來ない、造ると云ふ言葉と云ふ
ものは唯だその物を變化さすのである。
家を造ると言ふなら山が林にあつた木を
そこに持つて來て、色々寄せ集めたもの

△不生不滅常住論

物質は不滅である、勢力は不滅である。
そこで人間の魂と云ふやうなもの、誰が
て誰か拵へたものでもなければ、誰が
くすると云ふことも出來ないもので、最
も秀でたる所の作用である。是は決して
無い所から斯う云ふ作用が表はれて來る
こともなければ、又是が無くなると云ふ
こともないのである。従つて天地の萬物

と云ふものは誰に依つて造られしものにもあらず、無くなるものにもあらず即ち「不生不滅常住」なりと云ふ是が大真理である。さうして其の中に活きたる生命を有するが故に、即ち人間のやうになる場合もあり、佛様のやうな場合もあり、十界と申して様々なる精神的活動と云ふものを爲し現はして行くのであります。(拍手) そこで因縁の關係で悪い事を爲した者は悪い生活に移つて行く、善い事を爲した者は善い方に進んで行つて善い生活を送ると云ふ風に、即ち因果の法則に依つてそれが下がりもすれば上がりもすると云ふことを説いたのが法華經の諸法實相であります。

△佛性を論ず

さうして人にはそれだけの魂がある、是は人ばかりでない、どんな所のものも皆魂を有つて居る、殊に佛様になるべき性質を有つて居る。吾々人間は耶蘇教で言ふやうな「罪の子」ではない、佛の心を有つて居ると説くのが佛敎の妙味であります、是は耶蘇教でも云ふけれども、

基督一人は神の子であると言ふ、佛敎の方ではさうでない、「一切衆生悉く是れ我が子なり」と云ふ。是は法華經の譬喩品にも説いてある通り、悉く佛様の子であつて、一切衆生皆悉く佛になるべき佛性を有つて居るのである、是が如何に有難いことであるかと云ふことを能く味つて見なければならぬ。既に佛性がなかつたならば如何に徳を積んでも如何に善を行つても自分の價値と云ふものは限られて居るものであります。けれどもどんな人間も表面は罪の深いやうに見え、又愚かなやうに見えても、其の奥には佛性を有つて居ると云ふ、此の位有難いこととは無いのである。

れば直ぐ貧乏人になります。又どんなに儲けても死んで行けばそれを持つて行けるものではない、「死んでも是は放すまゝ」と言つて金庫の鍵を握つて居つても、死んで仕舞へば總ての物と相離れて仕舞ふものである、一朝無常の風に誘はれて死んで仕舞ふと「家の親父が死んだ、鍵は此方へ……」と云つて取上げて仕舞ふ(大笑) 今までの吾が傍に現在せる所のものとは離れねばならぬ、妻とも子とも離れるし、命にかへても云つて守つて来た財産とも離れなければならぬ。唯だ離れずして行く所のは己の魂である、故に其のものそれ自身が變ればさつぱり價値の無いものであつて、どうしても斯うしても詰らぬと云ふことであつたならば、其處で失望するより仕方がない、其の魂——己れ自身の本體と云ふものが價値の無いものであつたならば、實に落膽しなければならぬ(拍手) 表面はチョツと落膽しても、確かりした魂があれば奥には佛性がある、是は砕かうとしても砕けず奪はうとしても奪はれず、心の底に佛性として存在する、是が人間の何よりも

一番の樂みであるのであります。

△念佛主義者の缺點

此の點を法華經に於てはハツキリ敎へて居るが淨土宗や眞宗では其處を言はぬ何でも彼でも阿彌陀さんに救つて貰へ救つて貰へと云ふ。元來人間は威かしの方から感化するの樂だ、「ウツカリして居ると落るぞ」と言つて帶を捕へてやると「ア、怖いから……」なんと云ふてブル

／＼して手を合すことになるが、これに似た方面から行く宗教と云ふものは是は極く低い宗教となつて居る。併ながら是も少しは使はぬければならぬ、随分頭太い人間があるから少しはやらんければならぬ、極く罪惡に満ちたる所の惡心強盛なる所の人間、或は罪惡に習慣の付いた所の例へば安達ヶ原の鬼婆、さう云ふ者は「其の惡心を捨てぬ限りに於ては、お前は青鬼赤鬼が出て来て、鐵棒で以てドグかれるぞ、それも一遍ぢやない、生れかへると又ドヤスぞと言ふと」「ア、さうかな」と云ふことと漸く發心するのでありますけれども、斯う云ふ言葉を以て發

心させんならん人間が多いとすれば、日本の文明の前途と云ふものは頗る悲觀すべきものである(拍手)。

△善良なる向上性を基礎

として

惡い事を餘計した者でなければ信仰に這入れぬといふ其れではいかぬ。善良なる向上性を有たしめて其れを信仰に導いて進み行かせなければならぬ。威された爲に——苦痛の爲に宗教に這入つて來ると云ふやうな者が多くなつて來ては、甚だいかぬ。例へば諸君が子供をお持ちになつても「さう云ふことをすると警察に引張られるぞ」と云ふ言葉を以てなければならぬことがあつたとすれば、それは其の家庭は頗る悲觀すべきもので、お氣の毒であります、善い子供を有つたならばそんなことは言はぬでも「お前は勉強をしたら立派な實業家になれるが、是から勉強して立派な政治家になつて世の手本になつて呉れ」と斯う云つてそれで濟む「隣りの極道息子は赤い着物を着て行つた、お前も惡い事ばかりして居る

とア、成るぞ」と云ふことを澤山言はなければならぬやうな子供が出來たならば其の父母たる者は眞に慨嘆すべきこととあります。だからして人を「罪の子」と言つて罪の方の悪い方から救はんならば宗教が盛んになつたならば、其の國民の思想品性は甚だ悪いものである。所謂法華經はそんな忌はしいことは言はない、それを日本に適して居るのであります。(拍手) 表面罪の深いやうなことを指摘するけれども、佛性は少しも傷いて居らぬ。表面女人を排するやうだけれども女人は決して悲むに足らぬと言つて居る。周利槃特と云ふものは、愚かな人間であるけれども救はれた立派な佛性がある、斯う云ふ惡人でも龍女でも、外に捨てられた者でも無論法華經に於ては之を救ふのであります、善い方から救ふのである、佛性から救ふのである、是はあなた方が子供を教育する上にも或は奉公人をお使ひになるのでも、又政治家が國民を導く上にも非常に大事なことである。(未完)

日蓮聖人教義綱要 (第八回)

井村日成

第一章 佛陀論

第四節 十界の本主

前章に於て申し上げました如く、全宇宙を迷悟の二に分ち、更に十界に分別致しますが、此は其表面に顯はれた果報の相狀に依つて、無間の苦惱を受くるも地獄界とし、常樂我淨の四徳波羅密に安住せらるゝを佛界として、其中間の苦樂の程度を分別して十界と分けられたものであるが、此十界と分れて差別せられて居る現實界も、其本體より觀察し來ると、其本體に於ては差別あるべきものでない、一體不二にして平等の本體である、此意味合を詳細に説明したのが法華經の一念三千論である、斯様に論じて參ると宇宙の何れもが平等一體なものであるから、頭も尾も無いものになりはせぬか、丁度今の露國の現状の様になりはせぬかと云ふ心配がある、下手に一念三千論を取扱ふ

とそうなる、絶待の平等は混亂に陥入る虞がある、そこで其平等の中にも中心を立て、混亂に陥らぬ様にすると同時に、平等は其本體の上より見たる半面である實際の活動の上よりは十界は差別せらるべきものであると云ふ差別の半面を見て平等に流れず差別に流れざる様に適當の調節を取つて進んで行くのが一念三千の實際的發現である。

此一念三千の實際的發現の方法に二通りある、一は法華經蓮門方便品に基いて立てた方法である、天台大師の主唱せられた理の一念三千論である、二は法華經本門壽量品に基いて立てた方法である、日蓮上人の事の一念三千論である、此二つの一念三千の題目を分り易く云ふならば、其中心點の相違である。

理の一念三千論は自己中心の三千論である、事の一念三千論は佛陀中心の三千論である、理の一念三千論に於ては自己陰

妄の一念に三千の諸法を具すると云ふ理想論である、事の一念三千論に於ては佛陀果上の一念より三千の諸法を實現し來ると云ふ現實論である、其中心とする處を異にするに於いて其意味合が大變に異ふて來る、日蓮上人が本述の相違は天地水火の遺目なりと仰せられたるは此點である、此點は教義上大切な點でありますから、少々横道に入る様なれども此二の一念三千の相違の點を申上げて行く其自然に佛果起用の本筋にお断が運んで參りますから其お積りてお聞を願ひます

天台大師の主唱に依る蓮門法華經の一念三千論は、其修行の方法として觀念の行を採つて、一念三千の理論を自己の智慧に依つて證得せんと企てたのである、一念三千の原理に依りて宇宙を觀察するなれば、森羅萬象皆平等不二の體なるが故に、我等が如き迷の凡夫も、果上の佛陀も、一切衆生皆同體である、故に何れの方面より觀察するも同じ證悟に到達し得べき道理である、而しながら、佛界は高くして我等の思慮に及び難く、衆生界は廣くして、又我等の思慮すべきに非

ず、自己の心は最も手近であつて、只の一ツである、最も觀察し易い、自己の心の實相を了解し得たならば、佛陀も一切衆生も同時に其實相に達し得るものであるを考へた、天台大師が玄義の中に「衆生法は甚だ廣く佛法は甚だ高し初心に於て難しと爲す、然るに心、佛、衆生是の三差別無ければ、但自ら己心を觀するに則ち易しと爲す」と言へるは是れである、斯様に己中心の觀念方法に依つて宇宙を觀じ來ると全宇宙は自分の心の發現である、我等凡夫の心に具して居る三千の諸法が表面に活動して種々の事象を顯現したのである、自分の心の影が全宇宙と活現して居るのであるから、自心が宇宙の本主であり中心であると考へて、自分の迷妄の一念を基點として、此一念に宇宙の全體を攝收して、我一念の外に宇宙は存在して居らぬと云ふのが自己中心の一念三千論である、斯様に見て參ると迷は主て悟が従である、御遺文の一念三千抄(遺文二〇七頁)に「我等は妙覺の父母なり佛は我等が能生の子なり」又「佛は子なれども賢くましまして悟り出し給へ

り、凡夫は親なれども愚痴にして未だ悟らず」と云へるは天台の說に附順して説かれたもので天台主義の一念三千論である、迷へる凡夫を中心とし本主と立つるが故に此一念三千論は無明緣起の一念三千論とも云ふのである、斯様に蓮門の理の一念三千論は自己の心性を基點として其本體を觀察琢磨して其の本體を實現せんと努力するのであるから、非常の智慧と勢力とを費さずしては到底實現することとは出來ない天台大師は止觀十卷に其方法を説明せられたが現代の吾人は到底其方法を實行するの智慧と時間とを有しない、天台一生は現代に幾萬の寺院を有せりありと雖ども衆生救濟の方面に於て何等貢獻する處なきは其教義の根本に於て衆生救濟の實力を失ふて居ることを證明して居るものである、日蓮上人が天台の教義を以て、去年の曆、昨日の食物の如しと批評せられたのは此意味である、天台の一念三千論は現代の歐洲思想界を風靡しつゝある民主主義の思想である、我等日蓮主義を奉ずるもの、目より見れば過時去曆の舊思想であり我國民性に背反

せる惡思想であると言はねばならぬ、我日蓮主義者は此點に大に注意する處があるねばならぬと思ひます。

本門法華經に依つて立てられた事一念三千論は凡夫中心論でなく、佛陀中心論である、佛陀は一念三千の原理を證得して、其理を實現し得るの力用を證得し給ふが故に、其必要に應じて或は己身の佛陀を示現し、或は菩薩の姿を示し、或は人天に生を示して自在の應用無窮なり其自在の神力は三千の諸法を示現して雍塞する處なし即ち我全宇宙は佛陀が應用自在の活現體に外ならず、斯く觀察し來れば全宇宙は佛陀活現の全體である、然れば則ち佛陀は宇宙の本主であり中心であらねばならぬ、佛陀を本主とし中心と觀じ來れば我等は佛陀の大活動の顯現の中の一現象として此世に存在して居るのであるから、全宇宙は佛陀の活動の中に統攝せられて仕舞ふのである、佛法華經壽量品に「或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す」と説き給ふは此意味である、己身己事と

は佛界の事を説示することであり、他身は佛界の事を示現し九界の相状を説くが如きことを言ふのである、即ち十界の現象を實現するは佛陀の化他赴物の活動に外ならざるものと説きに相成つたのである、斯様な譯故本門の經説に依る一念三千論に於ての一念は佛陀果上の一念であり、三千の諸法は佛陀の化他赴物の活動なるが故に現實に顯現せられたる三千の諸法は迷の結晶として顯はれたるのでは無く、衆生化導の必要に依り顯はれた救済の力を有する三千の諸法である此を事の三千と云ふ、果上の一念より縁起し來る三千の諸法なるが故に、此三千の現象界は此を佛界縁起の三千と云ひ、又は佛果起用の諸法と云ふ、果上の一念を基點として諸法を觀察するが故に、其諸法は佛陀の活動の現象であると云ふこととなる、我等が如きも、自分の考へてしては迷へる凡夫なれども、實は佛の活動をお助申す一人と爲つて居るのである此に於て、我等が救済主として佛陀を仰ぐの意味も顯はれ、我等迷妄の凡天が佛子として佛と父子の名乗合を爲し得ると

云ふ原理も顯はれ來るのである、佛陀を宇宙の本主とし、十界の現象は佛陀果上の活現と見る處に信仰の對象として佛陀を本尊と爲し奉ることの意味が顯れる、此點が日蓮主義が我國體と一致して居る最も肝要な點である、今や民主的思想即ち無明緣起の思想が世界の上下を風靡するの際、然起て此惡思想を打破すべしは日蓮主義より外に無いと信ずる、我々日蓮主義は其根本教義に於て何うしても民主主義とは相容れざるものである、民主主義を認容するならば日蓮主義は其根柢より覆没せねばならぬ、日蓮主義を信仰する者は當然の結論として國家に忠實なる國民とならねばならぬ、萬が一にも日蓮主義者にして民主的思想を有するものあらば、未だ日蓮主義の何たるを解せざる似非日蓮主義者であると言ふを憚からぬのである、此點は是非とも注意あらんことを重ねて申上げて置きます。

第五節 佛陀の顯本

佛陀は十界の本主であることは前節に申上げた如くであるが、其佛陀の中にも更に其中心が無くてはならぬ、佛陀と云ふても一人では無い、澤山の佛陀の中に何れの佛を中心として集るか云ふことが明かにならねば一切の事に纏がつかぬ現代の佛教が、其信仰が分列して統歸する處を失ふて居るのは、全く其信仰の中心を逸して居る爲であると云ふことが出来るのである、如來出世し給ふて無量の經説ありしかども、最後法華經述門に至りて、其所説無量ありと雖ども其統歸する處は一乘なりと示して教法の統一を論じ、進んで本門に至りては佛身の統一を示して佛陀の中心を闡明せられた、即ち開述顯本の説がそれである、法華經壽量品に於て説かれた開述顯本の説相は但如來の一代の經々に對してのみならず、三世十方に通じて其統歸する處を示し其中心を定めて、我等衆生の適歸すべき處を示されたのである。

汝等諦かに聽け、如來の秘密神通の力を、一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して

阿耨多羅三藐三菩提を得給へりと謂へり然るに善男子我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由陀劫なり

と、此文が即ち開述顯本の文である、今現に説法しつゝある釋迦牟尼佛は、我等が愚かな思には成佛し給ふてより幾何も經給はず、菩提樹下に於て正覺を成じ給ふてより四十餘年であるかと考へて居つたのであるが佛は我實に成佛してより無量無邊百千萬億那由陀劫なりと宣言せられた、我は久遠實成の佛陀なりと發表せられた、今の釋迦牟尼佛が直に久遠の佛陀なりと宣言せられた處に最も重大なる意味がある、過去幾千萬億劫の長時間の佛陀を凡て開顯し來つて、今の釋迦牟尼佛に統攝し、未來幾千萬億劫の長時間も此釋迦牟尼佛に纏めて此今の釋迦牟尼佛に三世の佛法を統攝した、此に於て無量無邊の佛陀は存在して居つても、今の釋迦牟尼佛の活動の一現象に過ぎないものとなつて、中心は今の釋迦牟尼佛に定められた、故に更に説いて是中間に於て我然燈佛等を説き九度すべき處に隨つて處々に自ら名字の不同

年紀の大小を説き

とあるが、久遠劫來今日に至るまで、其中間に於て種々の名字を唱へ、或は一切十劫等の年紀を説いたことは皆我が衆生教義の必要より起りし活動に過ぎぬと説かれた、斯様な次第故、阿彌陀佛と説くも藥師佛と説くも皆此本佛釋迦牟尼佛の垂迹示現に外ならぬ事になつた、此事が顯はれてから歸つて法華經以前の諸經に自身の活動の状態を他佛に事寄せてお説きに相成つたに過ぎぬ事に爲るので、事實は釋尊の御化導である、法華經に於て開述顯本せられたに係らず、尙且つ彌陀を信じ藥師を信ずるが如きは愚の最も甚しきものと言はねならぬ、更に此經には釋尊の分身佛が澤山にあつて各方面に於て説法教化して御座すと云ふことが御説に相成つて居る、此分身の説も佛久遠實成の佛なれば、從つて分身の諸佛の多き事、池の蓮の年を経ること多きに隨つて繁茂するが如き有様で、分身の佛の多き事は、釋迦佛の久成を事實に證明して居るものである、此分身佛の多き事

に於いてもあらゆる佛陀を釋尊一佛に統攝し來りしものであることが證明せらるゝ、久遠實成の本佛釋尊は天の一月である、他佛は天月のしばらく萬水に影を浮べたるものにて、其實體あるものにあらず、本佛釋尊を忘れて、水月の諸佛を信ずる諸宗の輩は水月を取らんとする如き淺慕な猿の如く、遂には水中に溺るゝに至るであらう、日蓮上人は法華所要抄に左の如く論ぜられた

教主釋尊は既に五百塵點より已來妙覺果滿の佛なり、大日如來、阿彌陀如來、藥師如來等の盡十方の諸佛は我等が本師教主釋尊の所從等なり、天月の萬水に浮ぶ是なり(遺一〇三八)

又開目抄には

からてかへりみれば華嚴經の臺上十方阿含經の小釋迦方等般若金光明經阿彌陀經大日經等の權佛等は此壽量品の天月しばらく影を大小の器にして浮べ給ふを、諸宗の學者等は近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想をなし、或は入つて取らんとをい或は繩をつけてつな

きとどめんとす (遺七六五)
と仰せられて、本佛釋尊を知らざる諸宗
の學者の愚を懲られた、斯様に開導顯本
の説はあらゆる佛を集め來つて、其中心
は我釋迦牟尼佛なりと顯本せられて我等
の信仰の中心と爲るべき佛陀は、釋迦牟
尼佛以外には一人もあるべからざることを
を説き明かした、以上の開顯は時間の上
の開顯で其の釋迦佛を中心に開顯したの
であるが、經文には更に空間的に開顯を
論じて此娑婆世界を中心として釋尊は活
動せらるゝことを説かれてある、經に
是れより來た我常に此娑婆世界に在つ
て說法教化す、亦餘處の百千萬億那由
陀阿僧祇の國に於ても衆生を導利す

(縮三三二頁)

と説き給ふて、此娑婆世界は釋尊化導の
中心の場所である。故に常に此に在つて
法を説くと云ふたのである、他の國土は
機縁あれば其必要に應じて出現度生せら
るゝのであるから、此娑婆世界は釋尊の
化他利物の根據地と云ふべきである、我
等娑婆世界の衆生は教主釋尊の根據地た
る娑婆世界に生れて直接本佛の化導に浴

し得ることは如何なる幸福のものであら
うか、然るに娑婆の衆生にてありながら
水月たる阿陀佛の世界に往生せんと願ふ
ものあるに至つては實に沙汰の限りと云
ふべきである、娑婆世界を穢土としてつ
まらぬ世界の様に考へたのは、開導顯本
の前に於ては或は止むなき次第であつた
かは知らぬが、既に開導顯本し了つて、
此娑婆世界が本佛教主釋尊の根據地であ
つて、他の世界は影現の世界と云ふて影
の世界である、佛身に於ける天月水月と
の關係の如く、國土に於ても、此娑婆世
界は常住不滅の本國土であるが、他の安
養世界密嚴淨土等の世界は假に變化せら
れた無常の世界に過ぎぬ日蓮上人は觀心
本尊抄に

夫れ始め寂滅道場華藏世界より沙羅林
に終るまで五十餘年の同華藏密嚴三變
四見等の三土四土は皆成却の上無常の
土に變化する所の方便實報寂光安養
淨琉璃密嚴等也、能變の教主涅槃に入
り給へば所變の諸佛隨而滅盡す、土も
又以つて是の如し (遺九三八)
と仰せられた、此れは法華以前の諸經に

説かれたる國土は無常の國土であつて實
體なきを示されたのである。次に我娑婆
世界の常住不滅の世界なるを説いて
今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を
出でたる常住の淨土也、佛既に過去に
も滅せず、未來にも生ぜず、所化以つ
て同體なり (遺九三八)
と仰せられた、我等が所住の國土たる娑
婆世界のみが常住の淨土であることを御
示し下された以上法華經最上品に依つて
開導顯本せらるれば、佛陀は久遠實成の
釋迦牟尼佛を以て、統一の本佛として歸
命渴仰の中心とすべく、此娑婆世界を以
つて本佛世尊施化の本土として、此佛と
此世界とを以つて、時間空間を通じての
中心であることを明確に意識することが
最も大切な點である。

余有所感而特賦此以
贈於鼓城松尾研兄

大阪 山田 秀太郎

厚情無限與松濤
蒼鬱千年仙鶴蹤
君畫應彰天下瑞
人間感喜秀靈鍾

機微譚語 山根青村

五三、大義名分

室鳩巢嘗て楠公を論ず、其意に曰く楠
公召に應じて直ちに笠置山に造るは輕卒
なり、諸葛孔明の三顧して乃ち廬を出づ
るに如かずと、高山彦九郎此著論を見奮
然として罵りて曰く、腐儒何を事を論ず
るの迂なるや。夫れ元弘の時三國と年を
同して論ずべけんや。劉漢の末天下分
裂して豪傑並び起る、此時に當りて劉玄
德は故と履を販り蓆を織るの人、自ら稱
して漢室に肖と曰ふ、豈能く其真妄を辨
ぜんや、今の世卑賤の民源氏の裔と稱し
平家の孫と誇る者の如し、孔明の三顧に
して出るは我心猶以て速かなりとす、百
願二百願を累ぬるも未だ緩となさず、楠
公の如きは則ち異なり、赫々たる天朝は
神の在すとて六合の仰ぐ所、開關以來
神聖相承け皇統一系之を無窮に傳ふ、普
天の下率土の濱孰れか皇民にあらざらん

而して楠公は則ち廷臣の裔にして畿の民
なり、召命なりと雖も豈國家の難を視て
恬然自ら安んずべけんや、天皇座を蒙る
と聞き奮然袂を投じて起つ、安んぞ彼諸
葛亮の爲に做ふことを得んや、書を讀む
此の如くんば百萬卷と雖も何の益かあら
んと、其書を取りて之を堂下に投ず。

(通話文庫)

流石は彦九郎よく罵倒したり。由來
古今に論なく天下の腐儒が名分に迂なる
豈た鳩巢一人のみならん、宜しく正々
堂々疊みかけて十把一束に粉齏痛罵して
可なり、何の遠慮會釋をか要せん、史を
論ずるもの鎌倉時代の文物をたへて五
山文學を推賞措かず、然り文學としては
五山僧徒の手になりしもの相當の價値を
認めざるにあらざ、而も權門保庇の下に
雅々太平を誦ふて、道樂七分の閑云爲、
覇道を知りて王道を忘れたる奴輩の著、
此意義より見れば所謂五山文學は駄文學

なり閑文字なり、嘗に駄文閑字なるのみ
ならず、大義を無みし名分を没却して時
の執政者に阿諛煩附せる偽佛教徒の巧言
令色を織りなせる見るも忌はしき醜草な
り、唾棄すべき也、士人の手にすべきも
のにあらざ、若しそれ眞乎鎌倉文學を味
はんとならば、宜しく聖日蓮の遺文全集
に來れ、沈痛の文字剝切の教訓全編に溢
れ、世みな關東を慕ひ人悉く土風を貴
ぶ、眞最中に在りて、正々堂々大義を絶
叫せる聖者の高風、凛として今猶活ける
が如く、何處々々までも日本民族の血を
清め肉を引締めずんば止まざるの慨あり
斯くて一讀再讀遺文に親む程ならば、時
代弊風の刷新大義名分の論道、雲霧頓に
消散して三光、常に煌耀たるものあらん
聖語、昔より今に至るまで王法に敵を
なし奉る者何ものか安穩なるべき。一
人として素懷を遂げたる者なし、皆頭
を獄門に懸け骸を山野に曝す、關東の
武士等或は源平或は高家等、先祖相傳
の君を捨て奉り、伊豆の國の民たる義
時が下知に隨ふ故にかゝる災難は出來
候なり(宮城入道殿御返事)

五四、寛潤の襟度

古莊嘉門は熊本の藩士なり、慶應の頃、藩主を以て亡命して勝安房守の家にかくる、藩主之を聞き家臣安場保和を勝氏の許に遣はして古莊を捕へしむ。安場氏至れば勝氏之を客室に延きて面晤す、古莊はその隣房に仰臥して詩書を朗誦し居たりしが、折しも夏季の事とて客室と古莊の居室との襖開放しありければ、客室より一室に古莊を見らるゝに安場もさる者徐かに勝氏に對ひ、御邊の邸内に弊藩の古莊嘉門と云ふ者潜匿し居るよし聞き及びしにより、拙者今日受取のため參上致せり何卒當人を御渡し下さるべし、滅相もない事左様の人決して隠し置きたる覺候はず、イヤ確かに其よし聞き及びたりと押せどもつけども勝氏は更に知らぬ存ぜぬとの一點張、拙者は藩主の命にて古莊を捕へに來りたれども、貴殿に於て固く居らぬと仰せあるからは、定めて居らぬに相違あるまじ、然らば御免と辭して歸りぬ。古莊は此際兩人の問答を聞き乍ら隠れもなさて其儘仰臥高聲に朗吟を續け

居たりける、或人之を聞き、よくも三俊傑の捕ひける事よと評しあへりとぞ。阿武士は禮儀を知れる者人情を解せる者進退擒縱其節度を守りてゆめ婦女の行爲をなさざる者、自信力の強きと同時に人を容るゝ襟度ある者、義を見ては水火の中にも飛込むと同時に涙に摧けてははいと泣く事のある者、秀ては富士の嶽ともなり發しては、萬葉の櫻ともなる者なり、人は各々長所あり短所あり、其短を見ず其長を探る其處に士人の士人たる面影はあるなり、前掲維新當年の三俊傑、何たる男らしく且つやさしみある物語ぞや。顧みて當世の紳士は如何、利権争奪に夢中となりて死屍を鞭つゝの痴態を演ぜざる乎、自己本位の私情に制せられて十年の友を賣るの破徳を爲さざる乎、抑も亦男の中の男たる聖日蓮の御門下に重箱の隅を楊枝てつゝ、くの小政事家の跋扈跳梁せるなき乎。同行讚美の美德は愚事、兎角は自己と同等若くはより以上の才能技藝ある者を妬み、排擠陥辱に及ぼさるゝ、大事を忘れて些事に齟齬し、他の善事美譽に難辨つけて何の奴等がと



課題「野外董」

子爵 清岡長言選

○天 市外雜司ヶ谷 矢野 浪子

つくし生ふる野へのなわたのつぼすみれ 美やこのちりやさけて咲くらん

○地 小石川 松尾 清明

碑に心とられし山伏の あしもとちかく董さくなり

○人 日本橋 安藤 蘇南

くろかみに董さしゆく姉妹は 野邊の遊びのかへりなるらん

○佳 作

○大空に雲雀鳴る春の野にすみれつみつゝ遊ふたのしき 下總小見川 星野 聖祐

○飛ぶ蝶の羽風にかるくゆらきつゝ野邊のすみれのなにかたるらむ 京都御苑内 荒木せつ子

○むらさきの名におふ野邊のすみれ草花もゆかり

鼻で笑ふ悪風醜俗は無き乎。人天の導師と自稱し僧正僧都と誇り顔の御連中に、人を容るゝ寛潤の襟度なぞ薬にしたくも無く、得てして如上のさもしき修羅根性の雁首多き、さても憂たてさ如法闇夜の

日蓮上人研究の捷徑

(初めて上人を研究せんとなさる人へ)

文學士 笹川 臨風

凡そ偉人として我々が共鳴しよう、偉人の人格とか、教義からいろ／＼と我々が感動を得やうと云ふには、どうしても

偉人の傳記を研究

して見なければならぬ、そこで日蓮の御一生の傳記を一番初めに研究して掛かないと、研究の初歩と云へないと思ひます、所が此御傳記が未だ充分に出來て居らぬ、尤も化導記、或は註書、或は蓮公大師年譜、蓮公藏書とか云ふ書物があ

ります、或は日蓮大士眞實傳、それから明治大正年間に亘りまして、随分イロ

日蓮上人研究の捷徑

く傳記に關した書物もございませぬ、或は小説體に書いた物もありませぬ、或は眞面目に書いてある御傳記もありませぬ、未だ眞正に研究して居らぬ所がある、諸君が研究なさるなら

根本資料に依つて研究

なさらんといかぬ、私は自分が歴史家の立場から何事も根本資料に依らなければならぬと思ふ、幸なるかな上人には殆ど自傳とも言ふべき遺文録があつて御自分がして來た所の事蹟が載つて居るのであります、それでありませぬから日蓮上人の

の色にこそ咲け 本郷 熊澤 優子

○心なき人やふみなん野路に咲く董の花のあはれなりけり 大阪西區 長尾翁之助

○いたつらに摘みても見たきつほ董あまり多きに心動きて 日本橋 窪田 貞二

○長閑なる春に心のあくかれてすみれつみつゝ野邊にくらしつ 下總 大木五の子

○はるの野のみとりの中にむらさきのてふかとまかふつほ董かな 小石川 松尾田鶴子

○武士の夢見しあとの偲はるゝ廣野か原にさく董かな 名古屋 有田 麗陽

○氏神に詣てゝ子等と來て見れば野邊の董は今さかりなり 同 有田 信子

○うるはしく野邊をいろとる花すみれつむにはおしきこちこそすれ 丹後 廣岡 圓

○鳥人か空ゆく鶴の過ぎし野に今日も榮しくすみれつみけり 下谷 小柳 英夫

○飾なきひなのおとめに似たるかな野邊にやさしく匂ふすみれは 三重縣 辻本紅葉子

○春ふかきあさちか原のつほ董ま袖につまん籠はなくとも 下總 林 弘世子

○旅衣襦野におふるつほすみれ霞の袖に色あまされる 上總 福島 正之

○春の野の雨にぬれたる董草色一しほのながめなりけり 越前鯖江 山本 龍雲

○序列なし

○すみれ咲く野路わけゆけはさながらに春の心そとのけかりける 淺草 山根 日東

御傳記を研究するには、どうしても

遺文録に依るのが一番宜い

さうすると斯う云ふ疑が起る、或人が自分の事を自傳に書上げるには成るべく自分を偉さうに見せて法螺を吹くかも知らぬ、或は事實無いかを附加へて書くかも知らぬ、或は自分の恥辱となるやうなことは避けてしまつて書かないで置くやうなこともあらう、

ルーソーの懺悔録

などは有名な物でありますが、アレにしてもルーソーが多少自分を蔽ひ隠してあると云ふ批評がある、それでありながら自傳は必ずしも當にならぬ、根本資料は幾分疑を持たなければならぬと云ふ説も出るかも知れぬ、併ながら我々が日蓮と云ふ人格に對して見ると

アノ誠實な日蓮

が自分で嘘をお書きになるとは思はな

あります、宗教家に於ても其通りでありますから、奈良朝や平安朝に時めいて當時朝廷などが御尊崇なすつた宗教家は朝廷で作つた歴史の上に略傳が載つて居る、然るに民間の人の事は全く分らぬ、

日蓮は鎌倉時代の人

でありますから、鎌倉幕府の記録である吾妻鏡などに何か少しでも事蹟が載つて居るかと思ふと一言半句も出て居らぬ吾妻鏡は幕府の記録の中で一番信用すべきものであるのではありません、其他に於ては當時の諸家の記録を見ても、亦北條九代代記でもいけません、正確の北條九代代記に依つて見ても、日蓮の日の字も無い、それと日蓮の傳記を當時の記録から探し出して來ると云ふことはむづかしい。しかし、上人の御傳のうちで、當時政治上の事であるとか、若くは天災であるとか、或は月蝕であるとか、日蝕であるとか、若くは風が吹いたとか、洪水があつたとか云ふ時の事實を

遺文録と記録とて對照

日蓮上人研究の體程

して見ると着々と當る點がある、唯々は何時の世でもさうでありませんが、朝廷に關係ある、時の政府に關係ある、或は其時に時めいていろ／＼官憲と結び著いた人の傳記は歴史の上に現はれて居ますが民間に居る人の傳記は兎角現はれない、今日ではイロ／＼傳記が傳つて居りますが、以前にはこれが實に少ない、獨り宗教家ばかりでなく、如何なる者でもさう云ふ願がある、殊に藝術家などになると、舊い朝廷に仕へて居て、位でも貰つた人の事は出て居ますが、民間に居る藝術家の爲めに盡した人は、餘程

偉い者でも其事蹟

が分らぬ、それは舊い所を取つて來な

して見ると少しも違はない、寧ろ當時の記録に書いてある物よりモツと事細かである、それから歴史は大概朝廷の記録であるとか、幕府の記録でありますから、表面上の事は書いてあります、裏面の内的生活であるとか、其當時の人の心理現象であるとか云ふ點は少しも見えない、所が遺文録などを拜見しますと、當時の

内的生活或は精神

時の人の心理現象であると云ふやうな所謂裏面に觀察すべきものが澤山あります、斯う云ふやうなことを見ても、遺文録に書いてあることは、決して誇大でもなければ嘘つばちな事でないこと云ふことは、一の保證にもなる、それから専門の歴史家の書いた物を見ると、餘り科學的批判を下す爲め表面的の事ばかり研究しまして、例へば龍の口の御難なども、

日蓮御一生の中で最も大事變

であるのに、あゝ云ふとは實際に在りさうも無い、是は初めから在りさうもな

- あかくれて長き春日もくるゝまてつみあそひけり野へのすみれを 京都 中野 正甫
- 紫の野邊にほへるつぼすみれさすかに春の色に出でつゝ 上 總 萬新合一止
- 挿娘の春の色こそみえにけれ霞むす野にさけるすみれは 本所區 勝田 宣和
- 一夜ねておきゆく野邊のつぼ薔薇もかたみにつみてかへらん 下 總 春日よし子
- 春日野にすみれつむ子のあとになりさきになりつゝとふ小蝶かな 小石川 竹内 執榮
- 廣野原小川流るゝ岸の邊に委うつして薔薇くなら 名古屋 有田 健山
- 春の野の淺きなれにかけうつすみれの花の愛らしきかな 長野縣 太田 篤夫
- のとかなる野邊の千種の花かけにひそむすみれの匂ひ床しき 澁谷 立川 長重
- もえそめし草間に咲ける花すみれ高きかをりぞ野邊にみちける 三重縣 辻木由起子
- また淺き春にはあれと草薺の紫の色に咲けり 常陸 窪田 純榮
- 春來れは野邊にまつ咲くすみれ草の少女のつみはやすなり 遠江 佐原 弘風
- 少女子か薔薇にせむ紫の野邊におひたるつぼ草 京都 安良 日將
- 露雀なく聲も聞えて長閑なる野邊にすみれの花さきにけり 京都 竹本 蓮一
- 咲き匂ふ廣野の童日を浴びて都に欲しき春のいろ哉 青森 宮田 黄雲

- いつこまで咲きつゝくらん草草つむまに野へもたそかれにけり 下 谷 小柳 律子
 - 露雀なく野に打むれて樂しげに草つむなり里の少女ら 上 總 渡邊 乾航
 - 夕日さす春日の野邊の花薔薇める少女の袖もかをりつ 上 總 牧野鐵太郎
 - 朝かすみ伏見の野へをたてこめて若草ましりすみれ花さく 下谷區 小柳威之允
 - 世の塵をさけてひろ野に咲くすみれ末とことわに幸そ多かれ 雜司谷 矢野 直子
 - 去年つみしゆかりわすれぬ薔薇花おなしとこころに咲き出でにけり 本郷區 永橋 榮治
 - いそしめる身にしあれともなまめまし紫ふかきつぼ薔薇花 上 總 笠見 樂也
 - むさし野に紫にほふつぼすみれ里の少女のつみはやすらん 日本橋 鶴見きく子
- さとの子に都少女もたちまじりはる野のすみれつまぬ日ぞなき
- 次號「家」
切月末着の事
- 天位には選者の短冊を呈す
 - 御受取の方は御知らせを乞ふ
 - 用紙には住所氏名を記されたし

いと考へて、それから調べて見ると、成程他の記録にも何にも無い、唯々上人のお書きになつた物、これから後世の信徒なども、是は實際の歴史の上から見ると、少しも跡方は無いと歴史家は批判を下す然ながら未だそれは歴史家が研究の足らぬ所でありませぬ、此う云ふ歴史家はどうか云ふ風にしてゐるか云ふと、矢張り遺文録に出て居る、上人の御消息などに依つて、さうして批判を下して居る、現に

龍の口の御難

の如き條項に於ても極く表面的の觀察をのみして、少しも深くへ遣入らぬ、それは詰り言ふと御遺文録全體を見ず僅小なものを見て、表面の批判を加へるから餘程間違つて来る、歴史の研究もさう云ふやうな風に研究すると當てにならぬ、遺文録全體から研究して見ると、眞實の御傳記が分るやうになる、それでありませぬ、どうしても遺文録全體を通じて、時代を逐ひ順序を立つて行くと、自から

上人の行動が明白

に分つて来る、例へば種々御振舞書、或は佐渡御書、寺泊御書、身延山御書、或は妙法尼御返事、などを取揃へて見ると脈絡が一貫して、さうして上人の御一生が分ります、それでありませぬから先づ諸君が御研究なさる最初としては、御傳記の研究を爲さい、併ながら此御傳記の研究がナカク今日では充分に行つて居らぬと云ふのは、我々が御遺文録を讀んで、それから今まである御傳記と考へて見ると随分分らぬことがある、それは一々詳しく申しませぬが、今まで書いてある所の傳て遺文録に載つて居らず、載つて居らぬのみならず、どうしても其間を繋げなければならぬ事實がある、其事實も随分疑のあることがある、是は充分に研究がしてないからで、是はいろいろの點から一致共同して、偉人の本當の御傳記を作るやうにしたいと思ひます、それでありませぬから日蓮研究の上には何うしても先づ御傳記の研究が必要である。

●自慶會の其後



自慶會其後の講演は左の如し。

- △三月廿日 主催東京モスリン紡織 講 師 松尾 鼓城
- △廿二日 東京市電氣局青山教習所 講 師 大僧正 本多 日生
- △廿三日 海軍造兵廠 講 師 大僧正 本多 日生
- △三月二日 發會式後の講演は 講 師 海軍中將 佐藤 鐵太郎
- △三月十日 板橋砲兵工廠分工場鉄砲工場(在郷軍人職工會) 講 師 本多 日生
- △廿日午後一時より 東京モスリン紡織研究會 講 師 松尾 鼓城
- 講 師 宮岡 直記
- 講 師 海軍中將 宮岡 直記
- 餘興講演 松林 伯知
- △廿一日午後六時より 和強樂堂に於て(三秀會主催) 講 師 松尾 鼓城
- 講 師 岩野 直英
- 同 文藝士 小林 一郎

△第二回慰安善導會

尙四月一日は午後一時より統一閣に於てを催す。順序左の如し。

- 開會の辭 松尾 鼓城
- 自慶會の其後

京都自慶會支部

協議會ありし爲、五日夜岩野理事事本部より赴かれたり。十日大塚工場職工三百人の爲に目黒ビル會社にて講師を招聘し本部よりは井村理事出席の事になり居れるが雨天ならば順延なり。又十五日は鐵工組合の方にて上野精養軒に會合し本部よりは岩野理事出席自慶會の説明を致す由なり。

- 琵琶(盛久) 辻井 青山
 - 浪花節 東 日主
 - 祝獅子 仙太郎 社中
 - 曲藝二種 丸一 社中
 - 講談(大久保彦左衛門) 松林 伯知
- 以上の如くにして、無事終了、來會者約六百名なりき。

一統
非句
欄

題「殘花」雉子

- 雉子啼く勇士の墓のところく 烏鬼子
- 地圖になき國越坂や殘り花 同
- 煙り立つ菅野に雉子の頰りなり 立川
- 雉子鳴や稲遠からぬ母の里 同
- 村長は裏山つゞき雉子の鳴 周 女
- 雉子鳴いて宿まだ遠し雨の放 同
- 遠山雪燈々雉子喧々野徑哉 窪田鐵橋
- 殘り惜き花の目立つや谷の家 同
- 山の井や足もとに立つ雉子一羽 山中慶山
- 雲破る峰の道や雉子の聲 同
- 雉花一輪露何を黙すらん 上總鐵牛
- 雉子鳴いて満山風と雨響れぬ 同
- 峰より見えて谷間の殘花哉 宮田實雲
- 露や四山靜に雉子 鳴く 同
- 東雲や雉子に目醒むる山旅籠 同
- 猿打つて戻る峰や雉子の聲 同

- 祭神の知れぬ祠や雉子啼 烏鬼子
- 殘花新人想にふける戀 同
- 火繩持つ若き鉄手や雉子の聲 有田實陽
- 匂はねど殘花に銀の短冊揺く 同
- 残る花句碑を圍んで咲にけり 同
- 連や殘花の下の船の旗 同
- 電傳の路や上野の花残る 周 女
- 三度目はお付合にて殘花散 同
- 愚案無用茶店日あたる殘花散 山本龍雲
- 語らひし山樵の影少し雉子啼く 同
- 下馬札や櫻殘りて暮るゝ寺 同
- 友送る村の境や雉子の聲 同
- 雉子啼や古城の跡に雲低し 同
- 殘花數輪石の地蔵は花の主 同
- 四十曲日將に暮れんとす雉子の聲 青村道人
- 櫻散る山路や雉子の巻の伯父 鼓城山人
- 殘花して三里の飛客酒芳る 同

●次回題「鹿の子」「短夜」

二十五日迄に淺草區清島町統一閣内「はちす會」に送られたし。此句掲載は「みたら」に載す。

◎統一團名 四日市分團

統一團名古屋支部は三重縣四日市に分團を創立し團員百七十三名に達す、三月十八日を以て發會式を舉行せり状況は左記勢州毎日新聞記事の如し(新聞には一見見出し日蓮主義宣傳と題し本多大僧正來と特記せり)

都鄙を通じて精神修養の聲高きと軍人社会に眞面目なる信仰者の多きを以て愈々我が精神界に於ける活躍振りを増し、日蓮主義は宗派の如何を問はず憧憬する者を増し、あるが其の主義に根柢を置き僧俗共に力を協して第一聲を擧げたる統一團名古屋支部の四日市分團にては豫報の如く十八日發會式を法座に擧げたり之が爲め同團の總裁にして

今日蓮と稱せられつゝある瀧本法華宗管長の大僧正本多日蓮師は十八日午前七時四十九分四日市驛着の列車にて東京より來河されしは是より先き團員は午前七時に轟く煙花の第一發を合團に續々停車場に集集し「日蓮主義大講演會」又は「統一團四日市分團」など、記されし數聲の歡迎旗は春風に飄りて驛頭に樹てられ旋て列車繼續として歩廊に着すや

大僧正には名古屋支部長文學士國友日斌師の先導にて金光布教師を隨へ本覺寺、智玄寺兩住職始め男女多數の團員に迎へられ一二等待合室に於て少憩の後ち名譽團員にして四日市分團の顧問なる熊澤九右衛門氏及び水谷五郎九氏令嗣を先頭に一行驛車に搭せ見玉理事其の他評議員、世話人等これに亞ぎ濱町通りより中野堅町を經道に出で三浦橋を右折し

熊澤氏 別邸に入れるが大僧正には同邸にて分團役員等を會釋し休憩の上入浴し午後よりは熊澤家に於て分團發會の法會を終し團員の爲め特に一場の法話を爲したるが午後五時半に五れば大講演會開催の第一號砲として煙花放擧せられ續いて數聲の煙花と共に本多日蓮師は熊澤別邸を出で、市内新丁の法座に臨み午後

六時半より講演會を開き見玉理事開會の辭を述べ次で松井理事各方面より送れる發會式の祝電朗讀あり名古屋支部代表大口金三郎氏の祝詞あり布教師金光孝碩師の前讀「教の教」あり次に本多大僧正には「日蓮主義の特色」と云ふ題下に有益且つ興味深き大講演をなし感動を興へ

盛會裡に午後十一時過ぎ終れるが同夜は熊澤別邸に一泊し今朝名古屋に赴かれたり(三月十九日勢州毎日)

當日祝電を寄せられたる芳名を録して謝辭に代ふ。野口、井村、笹川、堀木、石川、鈴木、池澤、松尾、中村、成島、中田、萩原、朝倉、松木、上田、山本、島田、堀木、有田の諸師等の外、京都天晴會、金澤天晴會、京都法華會、見付玄妙會、豊橋天晴會等なりき

●名古屋市と本多師の一行

三月十九日午後一時より名古屋市靈山寺に於て祝會の六個條を金光布教師、信仰の妙處を本多親下。同日夜は常徳寺に於て統一團支部講演會、開會の辭を大口理事、家庭教訓と法華經を金光孝碩師、日本人の道徳と日蓮主義を本多親下、聽衆萬聲盛會裡に午後十一會散會す。

◎千葉縣下監督布教

木更津 成就寺 (國友日斌師の一行)

三月二十三日、監督布教師文學士國友日斌師は、午前十一時半千葉縣濱野村驛下車、本行寺に立寄り、午後一時五十分發にて、中津浦に到るや、飛山日甫老師竹内無着氏等同行、木更津津に到るや、飛山日甫老師山主は區内僧員、檀家總代理人等引導、出迎へられ成就寺着、午後七時より講演「開會の辭」を布教師竹内無

◎太田 萬光寺

廿六日、夜來の暴雨如何あらんと氣遣ひしも、今朝は早や天日麗かに輝き、管事酒井眞隆、神田日光氏等の見送りにて、倉持家を辭し、新治村に向ふ、區内僧員及檀信徒は歡迎旗を眞先に村境迄出迎へられ、午前十一時同寺着、修法、午後一時より講演あり、「開會の辭」を布教師木村日保、「國民修養の好機」を成島、「信仰の精華」を國友の三師にて演了、旅行に勞れたる國友師は大に元氣を回復し、講演は堂々の陣を張り、衆を穿ち細を開き、廳中の梅花と其好を讀み、聽衆に昨日に勝るの大感化を興えたり。又池澤管事か病軀にも係らず種々幹旋せられ尙木村夫人か一行の爲特に「茶式」を以て款待せられたるはこれ又共に深謝の至に堪えず。同日の聽衆は青年團、軍人團等にて殆ど萬堂立鐘の餘地もなき盛會。

◎宮谷 本國寺

廿七日、池澤管事等に見送られ、途中本納蓮福寺に立寄り井口氏の響應を受け、それより九時四十五分發列車にて、大綱驛に到着、管事田邊是教、堂亮雄、大綱婦人會、御書講、總代人、教區僧員等の出迎を受け、本國寺着、修法、午後一時より講演「開會の辭」を布教師土屋賢生、「生と宗教」を布教師秋山乾英、「信仰生活」を國友監督布教師にて演了。國友師は佛基兩教の立脚地を論じ、吾が日蓮主義信仰生活の極端を述べ以て其實感を興え一同法悦に包まれたり。猶池澤管事が病軀を厭はず遠路追隨見送られたるは誠に感謝に堪ぬ。同日は聽衆百五十名、土屋山主の盡力大に其効を奏したり。

◎小關 妙覺寺

廿八日、午前九時四十分、大綱驛發、同十時十五分東金驛下車、小竹管事、田邊管事等の出迎を受け、一行自動車に乗じ片貝、片貝館に到着、本日は小關妙覺寺に於て運教講演の善の處、同地修養會の希望に依り

着、「時局と宗教」を布教師成島泰行、「誠と力と感應」を監督布教師國友日斌の三師にて演了して閉會、同夜は寒氣も甚しく殊に水害の跡地故、聽衆は如何あらんかと思ひしに、山主及總代理人の盡力は大に其効を奏し多數の出席者あり盛會なりき、此寺團中に一老松あり野口僧正曾て來錫の折「啓運松」と名附、老山主の鑲鏤と共に、法運愈々榮ゆ、

◎押目 來光寺

翌廿四日、管事、總代人等に見送られ、午前七時五十分、木更津驛を發し、長生郡二宮本郷村押目來光寺に向ふ、既に茂原驛に到れば山田誠心氏等出迎られ、午前十一時半同寺着、午後一時より講演、「開會の辭」を布教師秋山乾英、「國民の自覺を促す」を成島、「偉大なる力の表現」國友三師にて演了す。同地は從來説教、講演といへば、老翁老婆のみを以て其主たるものなりしが、今回は山田氏等の盡力にて役場吏員、教員、青年團等中流階級の人々を以て充されたるは、誠に快感に堪えず、又閉會に際し別働隊として竹内願頌、倉上耀榮、國分國有氏等の講演ありたり。

◎豊田村 小學校

同月廿五日、竹内願頌、宮川光熙兩氏等の東道にて同郡豊田村小學校に到るや、同村團本教員五十餘名は、富田長松、渡邊彦太郎氏を眞先に紅白二流の旗を春風に飄して一行を歡迎せられ、同地素封家、倉持信知氏に休憩、午後一時より講演「開會の辭」を宮川光熙「日蓮主義と國民」を成島、「偉大なる力の表現」(二)を國友の三師にて演了。押目と豊田とは隣村にして、而も前日の講演を希望せるものありれば、其二として本日講演を爲し、聽衆三百五十餘非常の盛會なりき、而して同夜は倉持氏へ一泊、老刀自始め一族は懇に款待せられ、國友師老刀自の夫たる、故縣會議員、傳次郎氏の爲に、區内僧員一同と道善の趣向を修せられたり。

●本多大僧正巡教

前號に於て我下西下の報道をなしたるが、尙左の如く通信ありたれば記さんに、廿日午後三時、山本源次郎氏隨行、濱町鐵道工場に向はれ、直に全工場従業員に對して懇篤なる精神講話あり、午後五時強成寺へ歸山。同日午後七時より同寺に於て、

▲大阪天晴會

同會の主催にて大講演會開催
開會の辭 中平清次郎君
宗教の必要を論ず 京藤義應師
信仰の徳と力 本多管長親下
滿堂立鐘の餘地なく大く聽衆の感動を見たり。廿二日には兵庫縣

▲鷹取工場

に出席、職工二千餘名に對し、一時間の熱篤なる講話あり。同夜は

▲三宮 カフェーオリエント

に於て左の講話あり
開會の辭 草鹿辯護士
幸福の基礎 堀歩兵中佐
法華經の卓越せる所以 本多日蓮
四百の聽衆大に法悦を得たり、祝下は即夜歸東せられたり。

●神戸護正會

五日午後七時より三宮道徳會に於て神戸護正會を催し、創立一周年紀念講演會後小宴を開き會の發展を協議したり。
人生と宗教 寺門幾太郎
信は力也 川崎英照
歐洲戰亂と日蓮主義 萩原僧正

統一閣春季大會

三月廿四日午後一時公開、東京市各寺院出席、莊嚴なる法要修行後、講演開會、開會の辭小西日喜副代議...

統一閣幹事會

三月二十四日午後六時統一閣樓上に於て統一閣幹事會を開催す幹事は統一閣所屬の各會より總裁の依頼に...

森川日修師の轉住

千葉縣東金町本漸寺は明治三十五年の暴風雨の爲め境内樹木の過半を失し堂塔...

一華を見て春を知る

信仰の徳と力 川崎 英 照 菅 長 現 下 ▲廿二日、明德學園。久世、松下等の法話信仰談あり...

瑞穂通信

岡山武郡瑞穂村水田光昌寺大書院に於ては永田佛敎會第九回を四月一日正午より開會...

豊岡教廷

南無妙法蓮華經の題にて吉見俊教、壽命十五日讀經。南無妙法蓮華經の題にて吉見俊教、壽命...

參河教報

本月一、二兩日に亘り、參河野田村法華寺に於て西山日輪師導師の下に、顯本敎會の法要...

同田原

當行寺に於ても三日晝夜顯本敎會法山本布敎師演説、野中師節を勤められたり。

任せられたり轉任の意を本漸寺僧信徒に發表せらるゝや檀信徒の驚きと湯仰は洵に稀れに見るの状況にして...

伯耆の照量教團と登山信徒

立寺内照量教團は朝倉俊達師の盡力にて漸次發展すべく、而して四月大法會には信徒代表者二名登山すること...

日本國體と日蓮主義の寄贈

高岡市の本誌愛讀者島山友次郎氏は、先に本多大僧正著『精神の修養』及び『思想之調整』と曰ふ書を同市圖書館及中學...

朝鮮木浦天晴地明會通信

釜山に於ける天晴地明會長たる東洋大學出身横山惠正氏は、同地に於ける有力なる信者の一人が當地に轉住せられしを助つ...

大坂堂閣寺教報

三月十六日夜講演開會寸日蓮主義と現代を京藤義應。本尊に對する觀念を上田布敎師。▲二十一日彼法要を修し併せて開演す、判彼...

偉人誕生の地に法を説く

愛知縣下愛知郡中村は、偉人豊太閤の出産地なるが、有田安道師は同村白雲會春季總會の招聘に應じ、三月十一日午後二時...

名古屋教報

三月二日夜(土曜講演旅行寺)○八日夜(日蓮主義講演例會常備寺)○十日夜(國勢會靈山寺)各會共教育大家口全三郎君、有田安道師、國友文...

明石通信

明石町は川崎英照師奮闘し、小笠原寂天居士之を補助し、大に敎勢を張りつゝあるは心を強くす。三月は四日檀香會例會を講前會場に、川崎...

爾來毎月一回宛釜山より遠路懸々來水せられ、會場は重に十八銀行木浦支店長永見京造氏の宅を以て之に充て成は木浦商會議所樓上に於て、又は市内適當の場所を借り受け、法の爲め道の爲めに毎回熱帯を振つての講演に、會衆に對し深き感動を興へられた...

順正會講演會

三月二十三日午後六時より外神田の福田家に公開し、幹事の開會の辭に次ぎ、林學士高橋卯三郎氏の『我日本の使命』木村義明師の『靈化』會長熊井本光師の『社會問題と日蓮主義』なる熱誠なる講演あり、餘興として福田旭世女史の筑前琵琶龍の口(石井報)あり。

身讀會

四月三日祀元節の佳辰を以て牛込區榎町十六番地事務所に於て開會す、幹事諸又金太郎氏開會の辭を述べ、松尾誠城先生は『皇道の三大風』と佛敎の四風』に於て説述し、終つて會員諸氏の感想談を述べ會則に於て協議し散會したり。

京都通信(三月布教)

▲一日、國體會、本山に於て、眞信代惠銀井乾升。▲同夜、明德學園にて『佛敎の變遷』三好信道。『法話』萩原部長。▲二日、護正會例會『壽量品讀經』萩原部長。▲八日、成院院婦人會『日蓮主義大要』清水一乘。▲九日、正行婦人會『法話』萩原部長。▲九日、同志會北村方『佛の慈悲』三好信道。『敎教』井上師。▲十日、本正寺婦人會活ける信仰『金光孝碩』。▲十三日、本山婦人會『法悦的生活』金光孝碩。附、松下女史信仰告白ありたり。▲十五日、夜壽量品讀經會『佛の慈悲其二』三好信道。『人生の光りと徳』金光孝碩。▲十六日、法光院婦...

津山教信

美作津山町の能仁一十師が、能く其地方を教化するに盡力するは、其地通信に於て之を知ることを得、今三月中に於ける報道を見るに一ヶ月間都合十三回の説敎會を開催さる。一日同信例會。二日弘通所。三日同。十日は高倉村修養講話あり、上野部長、菅野校長に能仁一十師は、時局と思想と青年を講演す。十二日弘通所。十三日瓜生原にて。十四日五箇田村にて、法華經講義。十七日弘通所。廿一日本蓮寺法要並に説敎。廿二日弘通所。廿四日弘通所彼岸法要と説敎。廿七日弘通所等にして法運向上に盡さるゝは感すべし。

廣島教報

廣島は三月六日、日宗弘道會に於て大橋日輪師の國民の本領なる講演あり。十三日は本照寺に於て婦人會あり同師出演さる。十六日は妙詠寺に於て宗祖誕生會あり島田顯慈師の法悦生活の講演ありて餘興福引等あり。十九日より廿一日まで彼岸中夜の講演あり大橋師出演、餘興に東京津田旭世の琵琶を聴く。廿四日中夜可部町弘通所に於て大橋師の講演あり。

備前通信

和氣郡本成寺原田日男師の常説法は二月廿八日は日正師の御會式。三月十六日は同信會に於て佛陀最後の敎訓を、十八日は久成寺に於て三世等信を、廿一日彼岸中夜に付本成寺に、廿四日彼岸結日。廿七日は方山房次郎宅にて、何れも増信説法されしといふ。

常陸教信

常陸の鹿島牛島に唯一ヶ寺の顯本法華宗長照寺檀家は、現在二百五十幾戸であるが、日に月に多々倍々殖るばかりで今後五年乃至十年の後は既に五百七百を數ふるは決して誇大な想ではないと思ふ、前には大利根の流れの音、後には鹿島灘の波の響何れを見ても男性的であつて、而も侵略的である、故に人氣は此の地勢に養はれて幾らか荒々しいよふだが...

又面白い處もあるが、惜ひかな数十年の長き間、布教と謂ふ事が閑却されて居た爲に、信仰心が消耗して居る。然し是から田心を開拓したら、効果も擧るに相違なからふと思ふ、本春の彼岸會よりは、月々三回以上講義を開く事とし、先づ彼岸中に三回、舊曆涅槃會に一回、窪田純榮師の講演ありしが、参加者は六十乃至百餘名を數へて、教益の多大なりしものあり。

●山陰通信 三月四日夜伯耆國東伯耆郡泊村美須友太郎方に、講演信仰の權威を朝倉俊達。▲七日松崎小學校にて同町處女會開催、開會の時を渡邊小學校長婦人の理想を朝倉俊達。▲二十四日夜東郷村市橋常願方にて、信念の確立を廣瀬信光、佛教の實義を朝倉俊達。▲二十八日松崎本立寺にて宗祖御降誕會法要了りて、日蓮上人の本尊觀を朝倉俊達。▲二十八日夜因幡國青谷町日蓮宗説教所にて現代思想と日蓮主義を朝倉俊達、何れも講演す。

●長州教報 明治維新の策源地たる長洲の天地は團體意識の發達たる日蓮主義に對して、又神會するの機に富めり。當地研鑽會は、頃日長足の發達を成し、會員の熱誠真に見るべきものあり、進んで自己所屬宗團教師に、堂々論陣を張りて所信を告白するあり、或は久遠彌陀論の經證を追究して念佛布教師の心願を寒きらしめ、祖先の墳墓の前に永く念佛申すまじき由誓ひて熱烈なる先陳となるあり。藤四十の權門寺院は驚異の眼を以て日蓮主義の傳道に感耳驚心しつゝあり、三月六日妙蓮寺に於て研鑽會「眞の信仰」を一等軍醫村田清龍氏、「日蓮主義と國民道」を紀野俊雄氏、▲同日二日會員白銀書林に於て家庭及店員の爲に紀野氏講話▲同十六日小畑公會堂に於て青年團の爲に「協同一致の力」支部長村田清龍氏、「天民の自覺」紀野氏、▲同廿一日妙蓮寺に於て彼岸會修行「佛祖の教へたる信仰」紀野氏、▲同夜研鑽會例會を妙蓮寺に開催「須らく信仰の中心を確立せよ」川村文三郎氏、「入信の動機と信仰の告白」藤井又三郎氏、「日蓮主義の實現」世良醫士、「如説修行抄の一節」紀野氏、▲廿二日林誠一氏宅にて聯合講演を開く。「吾等の進むべき道」を法華寺住職秋田本定師。「汝の心の軌を教へ」妙蓮寺住職紀野俊達。何れも講演さる。因みに四月よりは毎月十二日今一圓公開講演を増さる。又有識階級の婦人の爲に楠香婦人會を開くに決定せり。

●佐々木英春尼遷化 同尼は、昨夏已來病床にありしが、終に去月十六日岡山縣久成寺に於て永眠されたり、師は故姓名日帝師の徒弟として、十二才の時剃髮染衣し、由來經典に佛書漢學等を學び、明治廿四年新補試驗に及第し、學士補を拜命し、第十三教區熱帯院の住職を命ぜられ、尋て法道寺へ轉じ、又大正二年五月第十五教區久成寺へ榮轉、大正四年推學士に補せらる、爾來専心寺務に従事し、信徒の信用極めて厚く、隨て寺禮の和合頗る顯著の爲、昨春發願して本堂の増築、疊替、湯殿等、一時に大修繕を成さんとすや、信徒數に於て不相應なる多大の寄附を得、大略竣功を告げ將に入佛式を舉行せんとするに當り永眠さる。唯尼は又茶花の興義を極め、又畫を能くし、門人多く有したりしに、惜哉今は則ち無し、享年四十一才。——(同地通信)

●多田家の特志 前號多田耕氏の長逝を報じたるが、同多田家に於ては本月京都本山大法會に際し、祖書要文三百部を新に印刷し樂譜者に分ち、又雜誌「日蓮」及本誌「統一」に對し各擴張費として各拾圓を寄附せられたり。

●廣告 一金拾圓也 多田房太郎殿 一金貳圓廿錢也 多田滿事殿 高進堂 高橋 辰二殿 右統一誌擴張費として御寄附被下難有願入候也 統一主任 松尾 鼓 城

●法華會講習會 清水龍山師「日蓮上人の教訓」 會期 四月廿二日(月)より一週間、前夜七時より九時 まで。 會場 本郷區淺草町長元寺 會費 一圓(學生五十錢) 聽講希望者は牛込區辨天町一七二、法華會宛に申込被下度候。

●轉任・改名・公告 千葉縣東金町 森川 寛行 本漸寺住職 左所に轉住し名を改め候間此段謹告候也 東京市赤坂區一ツ木町 常玄寺住職 森川 日修

●廣告 日蓮各教團主任御中 廣島市新川場町 大橋 日襲 本照寺 轉任廣告 小納事今般左記へ轉任致候 千葉縣長生郡豐岡村粟生野 圓立寺住職 富田 林惠

日宗法衣專門 青雲帽 系毅服 袴 飯田法衣店 京都市佛具屋五條北 振替口座大阪大座口 七四八六

定價表ハ御中遊次第 何時までも御送申上候

加賀 加能 亭 日本橋區坂本公園

●本誌掲載の廣告店は皆信用あり確實なる良店舗なり御信用の上御注文あれ

●日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 一直に御聯想下され候儀に候 京都 三條通鳥丸東入ル町 草木本店

電話 話中七三五番 振替口座東京二一五五九番

東京淺草區三好町二番地 草木支店

電話 話下谷三四三四番 振替口座東京二四五六八番

●佛具調度所 佛像佛具 位牌木鈕 宮殿幢天蓋其一式

●普通品定價郵券貳錢封入送呈 總本山身延山 總本山妙滿寺 大本山本國寺 日宗各教團 御用達

●御用達 京都寺町四條南大雲院前 辻井岩次郎 振替大阪八一五七番 電話下三二五八番

●位牌木魚卸小賣 御來店之節ハ陳列場へ 御來車被下度は迄トハ 一層勉強仕置候 ●佛具一切陳列仕置候



各本山御用達 佛像佛具 一切卸小賣

●三法堂佛具陳列場 定價表郵稅四錢 小賣部 京都三條小橋東入南側 長距離電話中貳七八番 振替口座東京貳〇七壹 大阪四貳五九

●卸部 京都三條通小橋西入 本舖 三法堂 藤田總治



(號九十七百二第)

- | | |
|------------------------|-----------|
| 日蓮主義の信仰と活動 | 大僧正 本多日生 |
| 日蓮聖人教義綱要(第九回) | 僧正 井村日成 |
| 宗教々育を國家最高學府内に特設すべき必要あり | 文部大臣 岡田良平 |
| 〇機微譚語(五五)不針金錢(五六)海鼠の俳句 | 山根青村 |
| 釋尊一代の概要 | 松尾鼓城 |
| 課題和歌「家」 | 子爵 清岡長言選 |
| 統一俳句、自慶會、各地雜報 | ……多數 |

所編輯一統町前山白川石小京東 所取扱務事行發
 ▶番三三五三三京東座口替振◀

出第七卷

世界的經典の
 根本的闡明

大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙
 文學博士 佐藤鐵太郎先生序
 文學博士 姉崎正治先生論文
 大僧正 本多日生師撰述 (全拾八卷)

隔月一册
 づ刊行

入函金方三裝洋判菊
 頁百四約卷每
 錢拾八圓壹各價正
 錢二十各料送地内

發行所
 町本區橋本市京東
 館文博
 番〇四二京東座口金貯替振

■第一卷より第七卷迄刊行
 本書は大藏經中重要なる經典約一千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且つ要文を翻譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也大藏經は佛教各宗の源流にして復是れ東洋文明の最高權威たるは論なき所今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要迫れるの時この大著に接す心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべき也。

- | | | |
|--------|---------------|--------|
| 本多 三版 | 法華經講義 (全二冊) | 各壹圓八拾錢 |
| 大僧正 四版 | 日蓮主義 (全一冊) | 九拾五錢 |
| 僧正 再版 | 修養と日蓮主義 (全一冊) | 九拾五錢 |
| 著師 | | 郵稅六錢 |

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

明治三十三年二月二十四日第三種郵便物認可
 大正七年四月十五日發行(每月一回十五日發行)
 統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所